

自己紹介

物質科学部門 青木百合子

2004年3月に広島大学理学研究科から転任しました。紋切り型のご挨拶よりはと、今に至るまでの私の少し変わった経緯を、ありのまま書かせて頂くことに致しました。

私は兵庫県の片田舎の貧しい牧師の長女として、カニ工場を改造した教会で生まれました。それが因縁で横這いの人生を歩むことになったのかも知れませんが、小さい頃はナイチンゲールの伝記に魅せられて看護婦さんになるのが夢でした。ある日、今は亡き母から“にんじん”という本を買ってくるように言われて本屋に行きました。ところが、道すがら“にんじん”が“キューリ”に化けてしまい、本屋さんに「キューリ下さい。」と言ったのです。すると、本屋さんはキョトンとして「キュリー夫人のことでしょう。」と言って、キュリー夫人伝を持たされて帰ったのでした。そんな性格では人命に関わる看護婦さん失格になったわけですが、そのお陰で偉大なキュリー夫人を知ったのです。極度の貧困の中、研究のために他の事は悉く切り捨てる筋金入りの生き様には深く感動したものでした。高校時代には、父がくれた天文学の本がきっかけで自作の望遠鏡で天体観測に熱中し、高知大学でセラミックスの水熱合成をしながらイケヤセキ彗星の発見者に弟子入りして天体の軌道計算を始めるといふ気の入れようでした。そうしたところ、またしても本屋で“分子軌道法”という九大出身の藤永茂先生の本を手にし、ミクロな世界にも軌道を計算する分野があることを知ったのです。そのうち福井謙一先生がノーベル化学賞を受賞され、高弟である今村詮先生が広島大学に着任されると聞いた私は、その翌年には一期生として居座っていたのでした。全く白紙の状態から量子化学の勉強を始め、博士課程では岡崎の分子科学研究所の諸熊研に修行に行き、自分の無能さに落胆しつつ何とか学位取得にこぎ着けました。ただ、量子化学は難しながらも粘り強さとアイデアが生かされる非常に面白い分野だと思い、研究さえ続けられれば、職を得ることには無頓着でした。9ヶ月のOD生活を経た後、信州大学繊維学部助手のポストを得たものの、したい研究もままならず、2年足らずで広島大学に戻りました。その後、フンボルト財団奨学生として憧れのドイツに留学し、厳しいドイツ語コースに苦しむ一方、日本では味わえない優雅な研究生活を送りました。帰国後は、未踏の課題であった高分子や固体の機能設計のための理論化学を行っていましたが、とんだきっかけでアカデミックハラスメントという貴重な試練が与えられ、大学上層部との壮絶な闘いのあと、助教授ながら独立した研究グループと認められるに至りました。ハラスメントによる2年間の空白を埋めるべく必死で研究に打ち込み、漸く軌道に乗ってきた頃に本学に採用して頂いた次第です。いろんな回り道をしてきましたが、現在は4名の研究員とともに、立派なC-cubeにて研究を推進できる天国のような環境を与えられて感激しています。応用のみならず基礎研究をも大事にされる構成員の方々に敬意を表すると共に、今度は前向きに、新しい分野を開拓できるよう研究・教育に邁進したいと思っています。